

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	朝田郁
論文題目	越境するアラブ —ザンジバルにおけるハドラミー移民の実像—		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士論文は、インド洋西海域におけるアラブ移民ハドラミーの移住活動と、その社会的・文化的インパクトを明らかにすることを目的とする。ハドラミーとは、アラビア半島南部に位置するハドラマウト地方出身のアラブで、東南アジア、インド亜大陸、西アジア、東アフリカと、インド洋に面した諸地域に移住してきた。本研究は、その中でも東アフリカ沿岸部の代表的なイスラーム都市、ザンジバルに移住したハドラミー移民を対象とする。</p> <p>本研究は 5 部構成、計 10 章からなる。第 I 部は、本研究全体の序論に位置付けられており、本章単独で構成される。アフリカというイスラーム世界の周縁部において、マイノリティとして暮らすハドラミー移民に注目した経緯を述べ、越境するアラブとして彼らをとらえた本研究の基本姿勢を示す。</p> <p>第II部は、研究の舞台となるザンジバルについての概要の把握を目的とし、2章から構成される。まず、第2章ではザンジバルとインド洋との関わりに注目し、海域世界の一角としての地理的な特徴、そこで育まれた文化の基底を成すイスラーム諸宗派の分布、そして都市国家の興亡という視点でとらえたザンジバルの通史を取り上げる。続く第3章では、ザンジバル住民における複雑な民族的背景を整理する。この地域を保護領としたイギリスによる報告と国勢調査を手がかりに、彼らのエスニシティについて考える。</p> <p>第III部は、ハドラミーによる移民経験をめぐる考察を通して、越境するアラブとしての彼らの姿に迫る。3章から構成され、まず第4章では、彼らがザンジバルを目指した経緯について取り上げる。移民が語ったライフ・ストーリーをもとに、彼らを取り巻く社会状況と移住活動の関わりを多角的に検討する。次に第5章では、ザンジバルで暮らすハドラミー移民のアイデンティティに注目する。新しい分析手法を活用しながら、ホスト社会において世代交代を経る中で彼らの民族集団としての意識にどのような変化が生じたかを明らかにする。続いて第6章では、移民たちを襲ったザンジバル革命について考える。革命に対する彼らの語りを手がかりに、流布された言説の問題点について検証する。</p> <p>第IV部は、ザンジバルで活動するタリーカ (イスラーム神秘主義教団) への参与観察の結果に基づいて、ハドラミー移民がこの地域にもたらした文化的・宗教的インパクトを検討する。3章から構成されており、まず第7章では、ハドラミーのタリーカであるアラウィー教団を取り上げる。先行研究において活動内容が不明とされていた同教団につ</p>			

いて、その集団儀礼の全貌を明らかにする。次に第8章では、同教団の活動において、最も規模が大きい儀礼である預言者生誕祭に注目する。教団関係者だけではなく、一般のザンジバル住民も関わるこの儀礼の構造と機能を考察する。続く第9章は、アラウィー教団の持つ開放性について多角的に考える。メンバーシップに現れた教団の思想と、儀礼に参加する人々の動機から、タリーカの役割とその位置付けについて分析する。

第V部は、本研究の結論となっている。単独第10章から構成され、これまでの議論の総括を行なう。越境する民としてのアラブと、アフリカに根ざしたアラブという、ハドラーミー移民における2つの側面から、彼らによる移住活動とは何であったのかを考える。

(論文審査の結果の要旨)

本博士論文は、アラビア半島南部イエメンからオマーンにかけてのハド라마ウト地方出身のアラブ系移民ハドラーミーの移住活動と、その移住先での社会・文化的インパクトを明らかにするものである。ハドラーミーはインド洋に面した広範囲な地域に移住したが、本研究で対象とするのは東アフリカ沿岸部、とりわけザンジバルに移住したハドラーミーである。

インド洋北部海域においては、毎年12月から3月にかけては北東から、そして6月から9月にかけては逆に南西からの季節風が吹ており、古くからアラブ系、ペルシャ系の商人がこの季節風によってインド洋海域を縦横に航海していた。インド洋に浮かぶザンジバルは、19世紀以降オマーン人スルターンの支配下にあった。そして、1964年のスルターン体制を打破したザンジバル革命を経て、同年タンガニーカと合併しタンザニア連合共和国を形成した。住民の約98%がイスラーム教徒である。ザンジバルには現在、約3000人のハドラーミーが住んでいる。

本博士論文の学術的意義は、次の3点にまとめることができる。第1点は、ハドラーミー研究という極めて歴史・宗教学的なテーマを、地域研究として現地フィールドワークと参与観察に基づき現代的視点から考察したことである。とりわけハドラーミー・コミュニティ内部に身を置き、イスラームの様々なイベントに自ら参加することによって、外部からは窺い知れない多くの情報を得ることに成功したことは特筆すべきである。また多数のインタビュー調査を行ない、移住当時を覚えている移民一世、二世から、その後の三世、四世に至るまでのライフ・ストーリーを収集するなど、今まで誰も手にしえなかった情報を収集した。

学術的意義の第2点は、ハドラーミー移民について、その時代背景、理由を詳細に明らかにしたことである。従来の研究は、アラブ系移民を、紀元前後からインド洋を舞台にして交易ネットワークを張り巡らせていた海の商人や、イスラーム化した諸都市で宗教的エリートとして迎えられた知識人として描いてきた。それは研究者の大半が歴史学を専門としており、利用可能な史料がイスラーム知識人によって書かれた文献に限られていたことに起因する。それに対して著者は、現地調査と文献調査により、ハドラーミーの海外移住は19世紀にその性質を大きく変えたことを明らかにした。この時代の主役は労働者であり、生活苦から祖国を後にし海を渡った経済難民としてのハドラーミーの姿を解明した。それを可能にしたのが、当時インド洋域一帯を支配していたイギリスの存在である。東南アジアなどインド洋東海域に対するハドラーミー移民が、各国が独立した第二次世界大戦を機に事実上終焉したのに対して、ザンジバルを含む東アフリカ沿岸部へ向かうルートは、このパクス・ブリタニカによって少なくとも1960年代まで続いていたのである。

学術的意義の第3点は、ザンジバルへのハドラー移民はホスト社会に様々な影響を与えてきたが、その最大のものが、ホスト社会のイスラーム化であり、そのプロセスの詳細を明らかにしたことである。イスラームの浸透に大きな役割を果たしたのは、彼らの神秘主義教団であるアラウィー教団であった。同教団は、ハドラーの宗教行為に係わるだけでなく、多様な民族的背景を持つ他の住民や、彼らを取り巻くホスト社会で共有されているイスラーム的な価値観の形成に係わってきた。

アラウィー教団がザンジバルに導入した最大の儀礼は、預言者ムハンマドの生誕を祝う祭事マウリディである。この祭事は、普段のモスク儀礼では見られない女性や子供を含めて、全ザンジバル住民が関わるイベントとなっている。アラウィー教団の最大の特徴は、儀礼におけるオープンな性質にある。他の教団と異なってアラウィー教団では、誰でも参加できるという特徴があった。その背景には、境界線を定めてメンバーを囲むことで組織化するのではなく、儀礼を通して人々が緩やかに結びつく状態こそが彼らの目指す教団の姿であるという思想があった。

ハドラー移民は、ホスト社会の片隅で暮らすマイノリティではなく、人々の間に多様なネットワークを築き、インド洋という舞台装置を最大限に活用した越境するアラブであった。これは、朝田氏の豊富なイスラームの知識と経験に加えて、アラビア語のみならず、現地スワヒリ語の運用能力を活かすことによって可能となった領域横断的な地域研究であり、高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年2月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。